

# 紀 要

第 19 号

2006. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

# 天神川流域における生産遺跡群の展開

畑 中 英 二

## 1. はじめに

滋賀県地域湖西中部に位置する天神川は、比叡山に源を発し、滋賀県大津市仰木から衣川に向けて東流し、琵琶湖に注ぐ(第1図)。流域には数多くの遺跡が展開している。湖岸近くの左岸には古墳時代前期以降に形成された大規模な春日山古墳群、同じく右岸には7世紀代に創建された衣川廃寺がある。これらの遺跡は、琵琶湖からみて最初の段丘上に位置している。これらの古墳および寺院の母体となる集落も段丘上に位置する傾向にある。

これらの遺跡群を貫流する天神川沿いに須恵器窯や製鉄炉、銅の鑄造遺構などといった生産遺跡が展開していることが、分布調査および近年の発掘調査によって明らかになっている。

そこで、小稿ではそれらの概要を記すとともに、生産遺跡群の展開の背景について予察を試見することとする。

## 2. 遺跡の概要

遺跡毎に概要を述べる。

### (1) 知原遺跡(第2図)

天神川流域の生産遺跡ではないが、近隣の須恵器窯関係の資料として掲載しておく。発掘調査は実施されておらず、詳細は明らかではない。

採集遺物は、杯H、甕などである。

### (2) 下仰木天神山遺跡庄田支群(第3、4図)

天神川左岸の丘陵東方の谷に位置する。1980年度に湖西道路建設に伴って発掘調査が実施された。既に灰原は破壊されていたが、2基の窯体が遺存していた(滋賀県教委・協会2002)。

2基の窯跡共に煙道から外側に取り付く溝(排煙調整溝とも呼称されている)が見られる。7世紀前半代を中心とする時期に一定の広がりをもって分布することが知られている。

出土遺物は、杯H、高杯、壺、焼台などである。

7世紀前半代の所産であると考えられる。

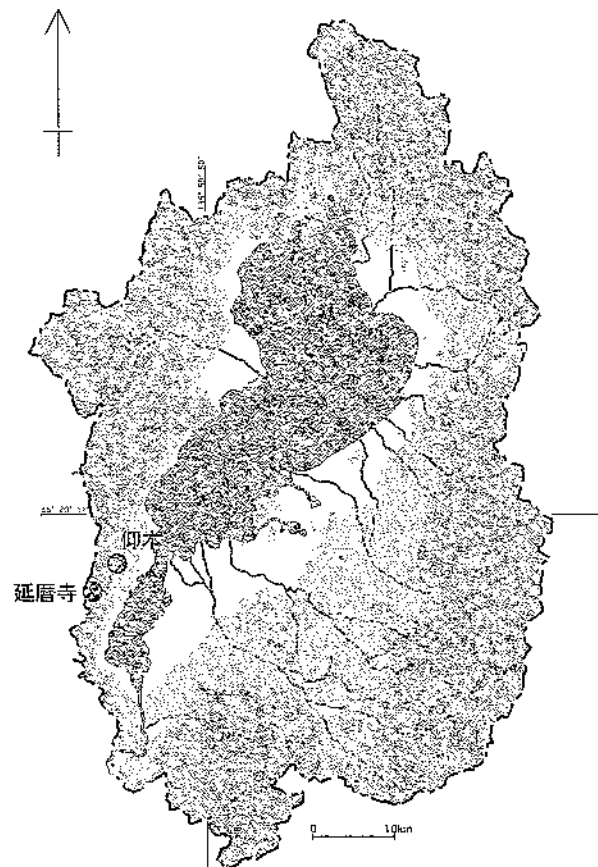
### (3) 下仰木天神山遺跡南庄支群(第5、6図)

天神川左岸の丘陵西方の谷に位置する。発掘調査は実施されていないが、京都教育大学考古学研究会の踏査によりその存在が明らかとなっている(京都教育大学考古学研究会1988)。踏査の結果、2基の窯跡が存在すると想定されている。

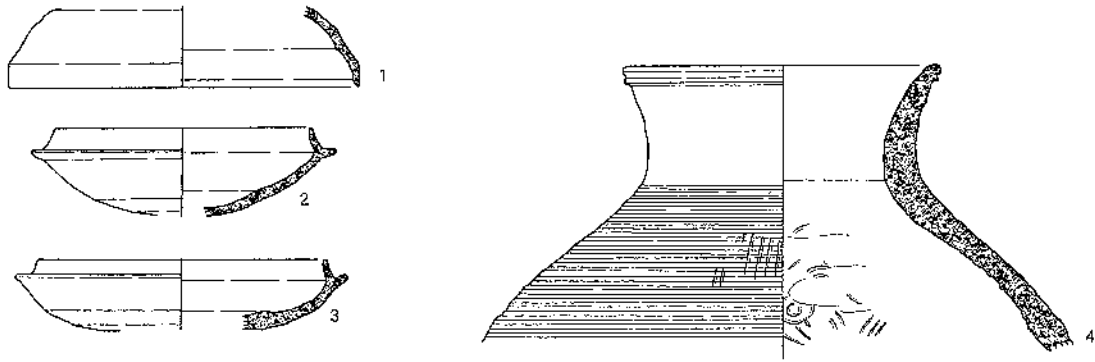
出土遺物は、杯A、B、壺などである。8世紀後半代の所産であると考えられる。

### (4) 仰木遺跡第1地点(第7図)

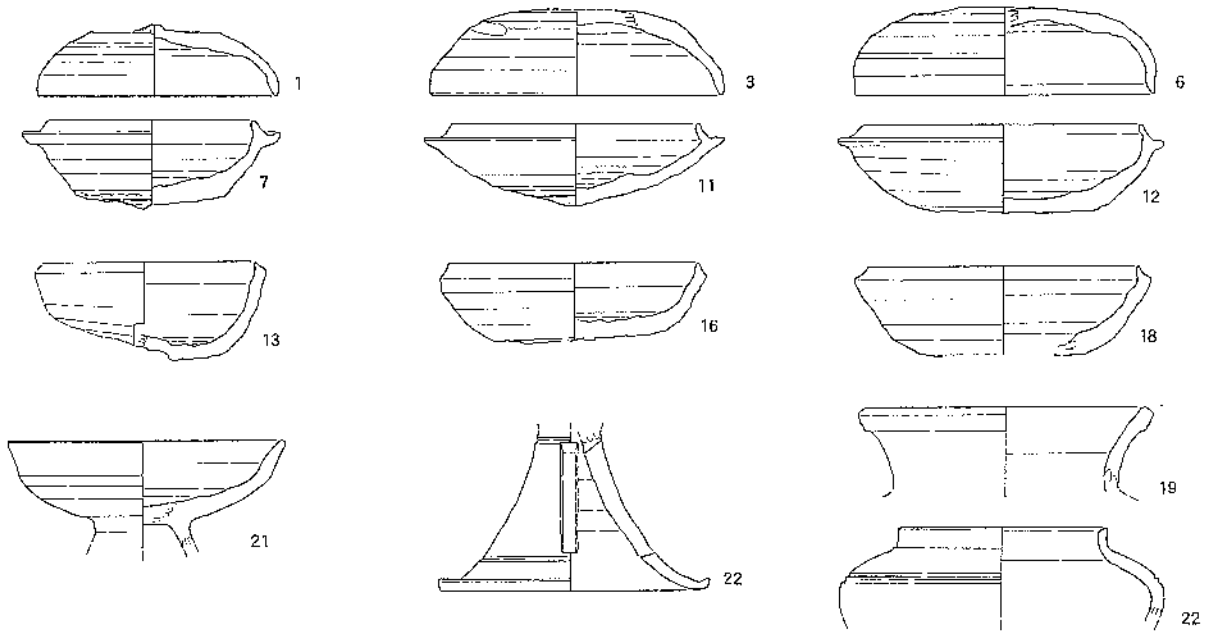
上述の2地点よりも天神川を遡った左岸側に位置する。発掘調査は実施していないが、筆者の踏査により窯跡の存在が確認できた。



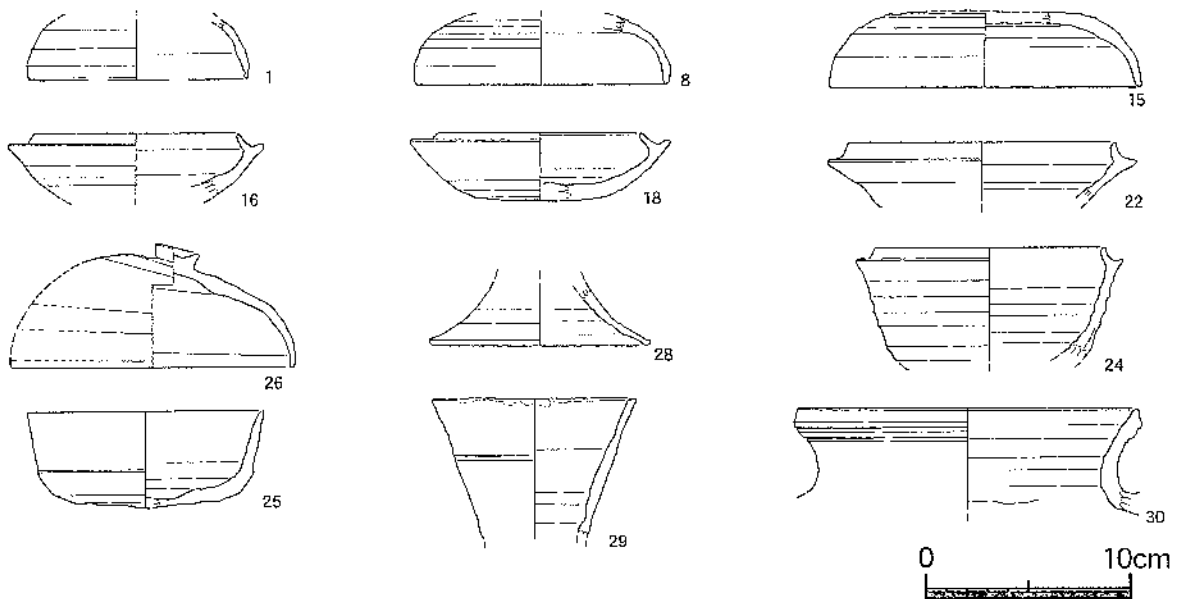
第1図 仰木(天神川上流域)と延暦寺の位置



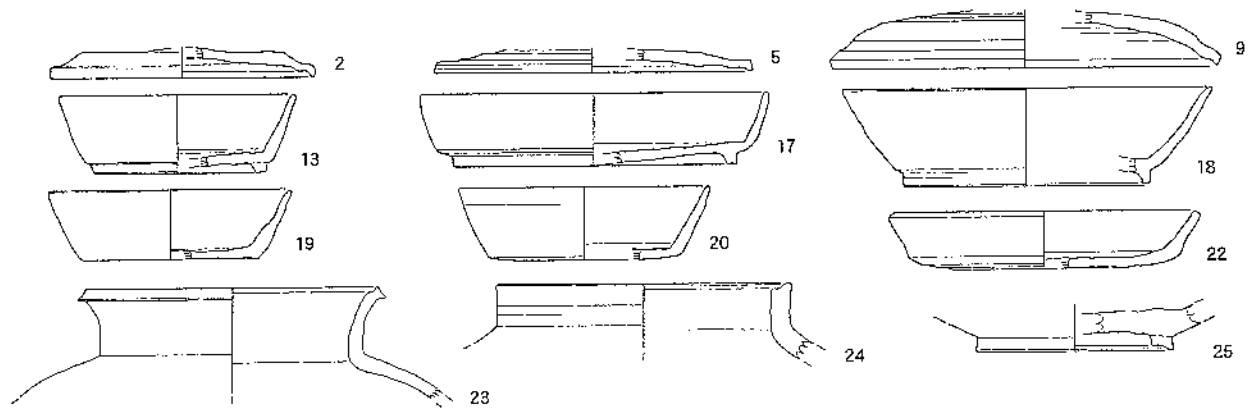
第2図 知原窯跡



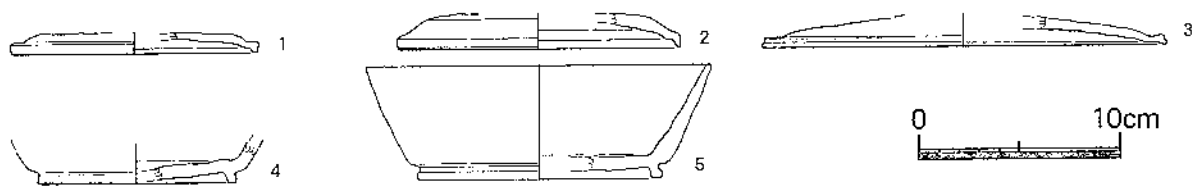
第3図 下仰木天神山庄田支群1号窯



第4図 下仰木天神山庄田支群2号窯



第5図 下仰木天神山南庄支群A号窯



第6図 下仰木天神山南庄支群B号窯

出土遺物には須恵器片、窯壁があるが、操業年代を推定し得る資料はない。ただし、滋賀県埋蔵文化財センター蔵の採集資料（分布調査によって採集されたのか、寄贈されたのかは不明）の中に9世紀中葉頃の須恵器があり、「仰木古窯址」と記されている。詳細な位置は明らかではないが、この窯跡に由来するものである可能性がある。

#### (5) 上仰木遺跡（第8図）

仰木遺跡第1地点の天神川を挟んだ右岸側に位置する。2004～2005年度にかけて県道伊香立浜大津線建設に伴って滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施したところ、製鉄炉、須恵器窯から流出したと見られる須恵器、銅の鑄造関係遺物を検出した。順次概要について述べる。

製鉄炉は尾根上に位置する。形状は長方形箱形炉で、両側に廃滓坑がある。鉄鉱石を原料とする。炉壁や鉄滓については谷底に廃棄している。製鉄炉に隣接して、谷に面した斜面を割り貫いた竈窯状の木炭窯がある。窯体内には木炭が立て並べられたような状態で出土している。操業年代を推し量る資料は乏しいが、鉄滓層の最下層から出土している土器から9世紀後半頃であると考えられる。

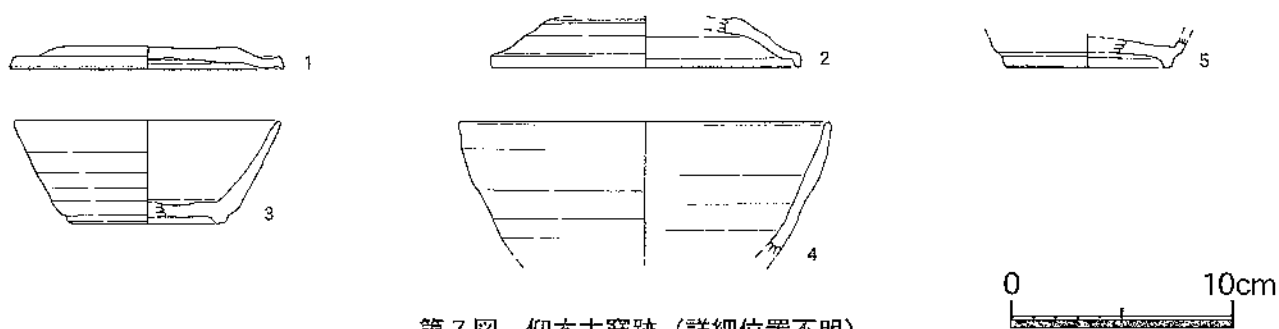
須恵器窯（1号窯）は、現時点では窯体そのものは確認していないが、木炭窯と同様に谷に面した斜面を用いて築窯されたものとみられる。谷（旧河道）からは、焼け歪んだ須恵器杯A、椀、皿、鉢、壺、土甕などと焼台が出土している。これらの須恵器は前段階のものとは異なり、平安京に供給した丹波篠窯の形態・組成に類似している。9世紀後半の所産であると考えられる。

銅の鑄造関係遺物については、尾根上で検出した。銅塊、銅滓、炉壁が出土しており、調査区周辺で銅の鑄造作業が行われていたことが推測できる。共伴している土器類は10～11世紀のもので占められることから、その時期に鑄造作業が行われていたと考えられる。

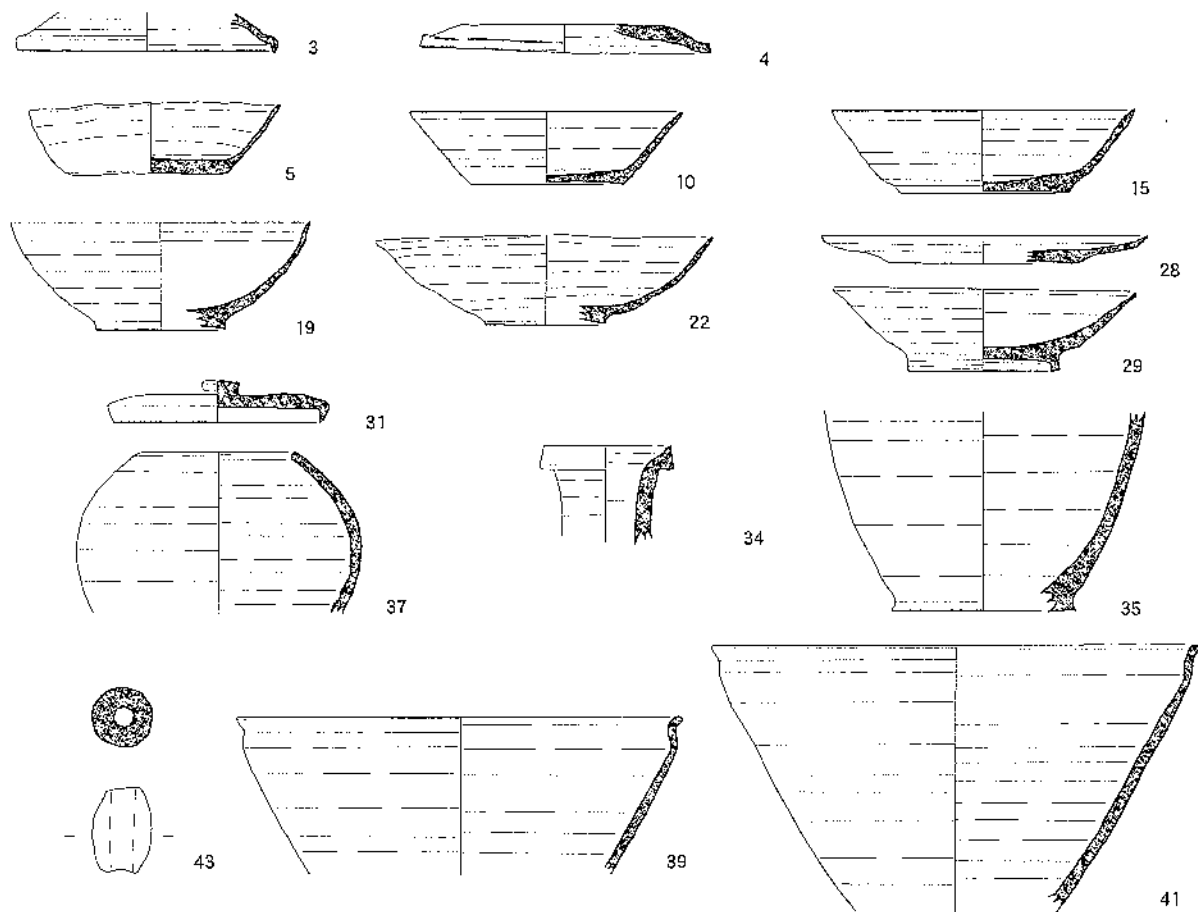
#### (6) 仰木遺跡第2地点

仰木の最奥部、天神川左岸に位置する。1997年に立命館大学によって発掘調査が実施された（立命館大学1999）。調査の結果、窯体が1基確認され、他にも窯体が存在していた可能性が指摘されている。ここで検出された窯体は地上式ともいえるものである。

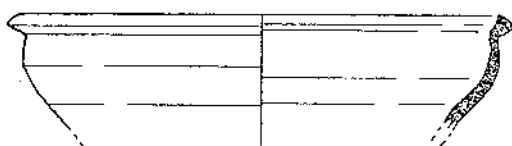
窯体内および周辺から出土した須恵器は、上仰木



第7図 仰木古窯跡（詳細位置不明）



第8図 上仰木遺跡1号窯



第9図 仰木遺跡第2地点（立命館大学調査分）

遺跡から出土したものと同様に丹波篠窯の形態・組成に類似する。上仰木遺跡の須恵器窯よりもやや後出する要素がみられ、9世紀後半から10世紀にかけての所産であると考えられる。

### 3. 生産遺跡群の展開と背景

#### (1) 生産遺跡の立地の変化

以上に天神川流域の生産遺跡の概要について述べたが、9世紀中頃を境に立地が大きく異なることが判る。9世紀前葉までの生産遺跡は、琵琶湖に面する段丘・丘陵上に位置している。一方、9世紀中葉以降はそこから隔たった仰木へと移動する(第1, 2図)。

仰木における考古学的調査は、十分であるとはいえないが、現時点での発掘調査および分布調査によると、9世紀中葉を遡る遺構・遺物は、縄文時代のものを除くと確認されていない。つまり、仰木においては9世紀中葉の生産遺跡を端緒に開発が進められていったことがうかがわれるのである。

#### (2) 生産遺跡の経営母体

9世紀中葉までの生産遺跡は、春日山古墳群や衣川廃寺の位置する丘陵で展開する。これらの生産遺跡の経営母体は、春日山古墳群や衣川廃寺の造営主体であると考えるのが妥当であろう。一方、9世紀中葉以降の仰木における生産遺跡の経営母体についてはいかがであろうか。天神川という水系を同じくするとはいえ、新規開発ともいえる環境であることから若干の躊躇をおぼえる。加えて、仰木という地は延暦寺との関わりを軽視できない。延暦寺の北端に位置する横川は、近江国側に抜ける主要道は仰木を経由するしかない。文献史料の残されている13世紀以降は、確実に延暦寺領であったことが知られており、延暦寺と仰木との関わりは極めて密接なものである。1990年の大津市教育委員会による上仰木遺跡の発掘調査において出土した12世紀代の土師器皿には、僧兵などが描かれており、仰木と延暦寺との関わりを物語っている。

延暦寺の展開を見てみると、8世紀末の創建期から大規模であったのではなく、鎮護国家の寺院として、国家の援助を受けつつ9世紀中葉以降に寺院と

しての体裁を整えていったことが知られている。突発的にみえた9世紀中葉以降の仰木の開発は、その後の延暦寺と仰木の関係を見る限りにおいては、延暦寺が開かれていく過程と軌を一にしていると見ることも可能なのである。

#### (3) 須恵器をめぐる技術系統・製品の分布

仰木における生産遺跡の経営母体については、春日山古墳群や衣川廃寺の造営主体と同様であった可能性もあるが、延暦寺との関わりも否定できない。そこで、ここで生産された須恵器の技術系統や製品の分布状況を仲立ちに具体的な様相について検討を試みる。

##### 技術系統

須恵器の技術系統および製品の形態・組成について見てみると、下流側に位置する下仰木天神山遺跡の両支群および上流側に位置する仰木遺跡第1地点は近江地域の伝統的ともいえる形態をしているが、上流側に位置する上仰木遺跡と仰木遺跡第2地点では丹波篠窯に類似するものとなっている。この要素から、窯跡群を2分することは可能である。上流側に位置する仰木遺跡第1地点においては、近江地域での伝統的な形態・組成の須恵器が生産されていることから(今後、詳細な検討が求められるが)、須恵器窯が上流域に移動してから、技術系統が変化した可能性がある。

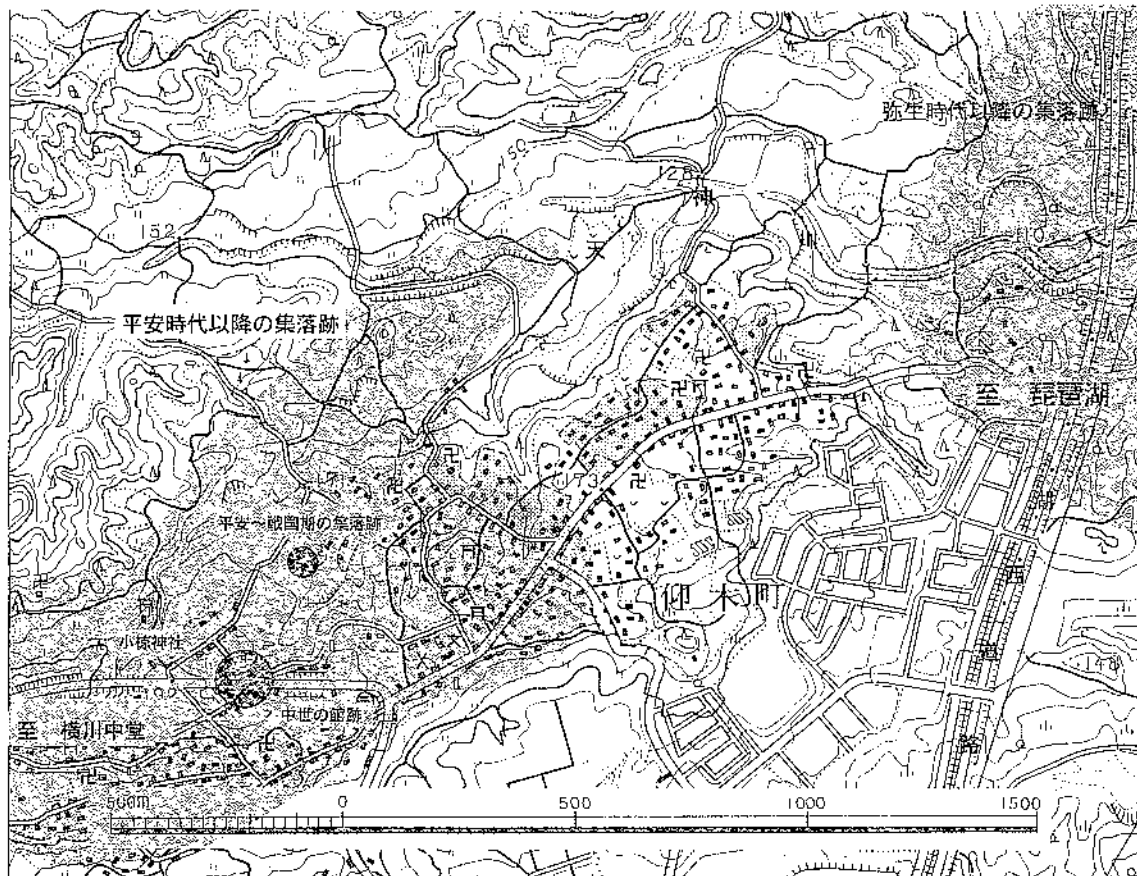
このことから、おそらくは天神川流域において生産にあっていた工人群は一連の流れの中でとらえることが困難ではあるが、経営主体は同一であった可能性を想定できる。

##### 製品の分布

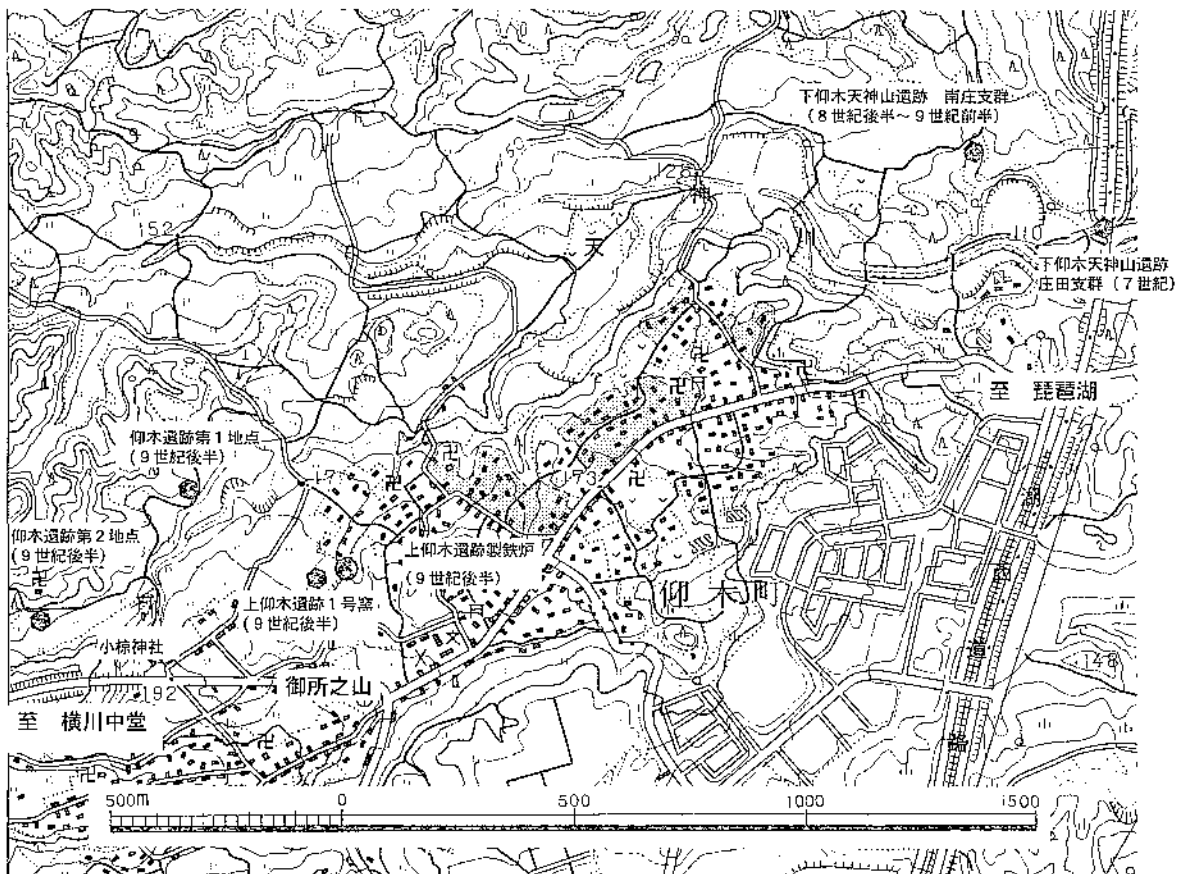
ここで生産された須恵器の分布範囲についてみてみよう。

仰木産の須恵器の形態や組成は丹波篠窯産の須恵器に類似するが、それらには断面に流文構造がみられるものが散見されるものの仰木産の須恵器にはそういったものは見られない。胎土を肉眼で識別しうることから両者の識別は可能となっている。

延暦寺における9世紀後半から10世紀にかけての須恵器は、一部(平安京近郊産の緑釉陶器素地)を除いて仰木産で占められる(延暦寺1990)。これ



第10図 天神川流域の集落遺跡



第11図 天神川流域の生産遺跡

らの須恵器は、滋賀県湖西地域（南部を除く）に広く分布している。湖西北部には延暦寺に関わる荘園が多く分布していることを勘案すると、延暦寺との関わりはやはり否定しがたいのである。

#### （４）現時点でのまとめ

##### 一生産遺跡群の展開と背景一

以上の点から、生産遺跡群の展開と背景について予察を試みよう。

天神川流域の生産遺跡群、ことに上流域におけるものは、立地と年代から見ると、延暦寺が開かれていく過程と軌を一にしている。それ以降の延暦寺と仰木の関わりを考えると、9～12世紀にかけての文献史料は残されていないものの、仰木の開発の契機は延暦寺とは無縁ではなかったといえるだろう。

更に、製品の分布圏は、延暦寺との関わりを想定できるものとなっている。

ただし、生産された須恵器の形態・組成などから見ると、工人集団が新規に編成されたものではなく、伝統的な集団を取り込みながら変容していった可能性を想定することができる。

以上の点から、9世紀中葉以降における生産遺跡を媒介にした仰木の開発は、延暦寺が本格的に開かれていくことを契機とし、天神川下流域の伝統的な須恵器工人などを取り込みながら進められていった。また、製品の分布状況から、直接的な経営を行っていたか否かについては明らかではないものの、生産・流通に延暦寺との関わりがあったことは否定しがたいと思われる。寺院造営に不可欠な鉄素材（鉄釘）や銅製品の鑄造を行っていたことも勘案すると、地域ぐるみで延暦寺造営を支えていたと考えることができるだろう。

（はたなか えいじ：企画調査課 主任）

#### 参考文献

- 延暦寺『延暦寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年。  
京都教育大学考古学研究会「Ⅱ 天神山古窯址群について」『史想』21、1988年。  
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「下仰木天神山遺跡」『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』2002年。  
立命館大学文学部学芸員課程『滋賀県大津市仰木遺跡発掘調査概報Ⅰ（遺構編）』立命館大学文学部学芸員課程研究報告第8冊、1999年。



#### 編集後記

序文にありますように、本協会は35周年を迎えました。これまでに蓄積された文化財に関する情報は膨大なものであります。その情報にふたたび埋もれることのないよう心がけたいものです。さて、今回の紀要には8本の力作の論考が寄せられました。さらに、35周年を記念して紀要の総目次も巻末に掲載いたしました。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを願っております。

(M.N.)

平成18年(2006年)3月

#### 紀 要 第19号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL (077)548-9780

FAX (077)543-1525

URL: <http://www.shiga-bunkazai.jp>

E-mail: [mail@shiga-bunkazai.jp](mailto:mail@shiga-bunkazai.jp)

印刷・製本 富士出版印刷株式会社